

氏 名	いし ざか しん や 石 坂 晋 哉
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 52 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	現代インドのガンディー主義と環境運動 —— スンダルラール・バフグナーの思想と実践を中心に ——

論文調査委員	(主 査)
	准教授 田 辺 明 生 教 授 足 立 明 准教授 東 長 靖 教 授 小 林 繁 男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、北インド・ウッタラーカンド地方のガンディー主義者スンダルラール・バフグナーに焦点をあて、現代インドのガンディー主義的環境運動の特徴を明らかにすることをめざしたものである。バフグナーの知的遍歴と環境思想の内容を明らかにしたうえで、チプコー運動（森林保護運動）とテーリー・ダム反対運動というふたつの大きな環境運動において彼の思想と実践が果たした役割について、長期の臨地調査にもとづき具体的に論じている。

序論では、ガンディー主義的環境運動を考察するための概念的枠組を検討している。ガンディー主義者とは、簡素・禁欲の共同生活を送りつつ M. K. ガンディーがめざしたスワラージ（独立＝自己統治）やサルヴォーダヤ（万物の向上）などの理念を追求し社会改革のための諸活動に従事している活動家を指す。そして環境運動におけるガンディー主義者は、地元の当事者の立場に立つことをめざしつつ同時により広いよそ者としての視点をもつキーパーソンとして捉えられる。キーパーソンとしてのガンディー主義者は、運動を正当化し人々の参加を動機づけるために、意識的かつ戦略的に、参加者に共有されるような状況定義や自己イメージを運動のフレームとして設定したのである。

第1章は、インドにおけるガンディー主義の歴史を描写している。1970年代後半以降の第2世代のガンディー主義者たちは、スワラージ、サルヴォーダヤといった理念をいかしつつ、インド各地で環境問題に取り組むケースが目立つようになった。また、この第2世代のガンディー主義者たちは、全インド・レベルの中央集権的な組織ではなく、多中心的なネットワークを形成しており、それは情報交換の場としてまた互いの精神的支えとして重要な機能を果たしていることを指摘した。

第2章では、ウッタラーカンド地方におけるガンディー主義の歴史を概観している。ガンディーの弟子となったふたりのイギリス人女性、ミラー・ベーンとサララー・ベーンの活動の概略が紹介され、彼女たちは地域の環境保護にも関心をもった先駆者の人物であったことが指摘されている。

第3章は、スンダルラール・バフグナーの知的遍歴および思想について論じる。バフグナーは従来、地元住民の生活向上をめざした諸活動を行っていたが、1960年代後半以降、森林消失に端を発する住民たちの生活苦の状況を知るとともに書物等を通じて世界的な環境保護の潮流に触れたことから、森林保護・伐採禁止の運動を進めるようになっていった。バフグナーの環境問題への取り組みの基底には、「昇華」の哲学があった。これは、人間は欲望を解放させてその実現を追求するのではなく自然を昇華させて文化的社会を作っていかなければならないとするもので、自然および人間の、個々の存在の本源的可能性を生かそうとするものである。この昇華の哲学は、地域の固有な生態そして人々の多様な声を尊重しようとするバフグナーの姿勢と結びついており、そうした姿勢によりバフグナーは環境運動の中核として多様な人々を結びつける役割を果たしたのである。

第4章では、森林保護のチプコー運動の展開のなかでスンダルラール・バフグナーの思想と実践がいかなる役割を果たし

ていたかについて具体的に描写し、その過程を分析している。チプコー運動においては1978年以降、バフグナーらを中心として地元での森林産業の振興に代えて、森林の全面伐採禁止を求める森林保護の環境運動というフレームが形成されたことが指摘されている。これによってチプコー運動は、単にローカルな利害を守る運動ではなく、環境運動としての自己イメージを対外的に確立することができ、結果としてグローバルな森林保護・環境保護の潮流に乗って成功へと導かれたのだ。

第5章は、テーリー・ダム反対運動の過程を記述し、そこにおけるスンドルラル・バフグナーの役割について論じる。テーリー・ダム反対運動においては1992年に、バフグナーらを中心としてダム建設に反対するだけでなくヒマラヤ地域全体の総合的な環境政策を考えていこうという「ヒマラヤを救え運動」というフレームが形成された。これによってテーリー・ダム反対運動は、具体的なオルタナティヴを提示する政策提言型の運動としての性格をもつようになり、またグローバルな「新しい社会運動」のひとつと呼び得るものになった。しかし他方でそのフレームは、現在までのところ地元住民の運動参加を促進させるものとはなっていない。

第6章では、スンドルラル・バフグナーの行脚と断食に焦点をあて、その実践の思想的背景を明らかにするとともに、運動の展開によって行脚と断食がいかなる意味と効果をもったかについて具体的に論じている。まずバフグナーの行脚は、自らが民衆の世界に入り込み民衆の立場に立ち民衆とつながろうとするものであった。そして、行脚を通じて新たな社会活動家たちを育てると同時に村々をつなぎ、地域環境に立脚した生活の普遍的な価値について自覚を相互に持つための運動形態だったのである。またバフグナーの断食は、それぞれの利害主張、欲望の解放を肯定するのではなく、我執を捨て自己を浄化しそれによって見出された真理を公の場で提示する「昇華の政治」という方法を体現していた。バフグナーの自己放棄を通じたこの昇華の政治は、利害や価値の自己主張を基礎とする通常の政治的な対立構造を無化する力を有していたのである。

全体として、1) キーパーソンたるバフグナーは、運動のフレーミングにおいて重要な役割を果たし、チプコー運動やテーリー・ダム反対運動を単にローカルな利害を主張する農民運動ではなくグローバルな価値を持つ環境運動として意味づけたこと、2) バフグナーの思想の根幹には昇華の哲学があり、社会および自然のなかの全存在を尊重し、それらの本源的な可能性を目覚めさせることを目指していたこと、3) ガンディー主義者の全国的なネットワークは、貴重な動員手段として、運動の拡大と持続にとって重要な要素となっていたこと、4) バフグナーは、地元根差して地元から発想し行動しようとする一方で、多様な声を尊重し、地元からの運動をより広い運動ネットワークや普遍的な価値へと結びつけたこと。5) 現代インドの環境運動は、それぞれの地域におけるローカルで固有の問題を、より普遍的なフレームと結びつけ、より広いネットワークへとつなげていく性格をもつが、そこにはキーパーソンとしてのガンディー主義者が重要な役割を果たしていること、を指摘し結論としている。

論文審査の結果の要旨

現代インドの環境運動においてガンディー主義やガンディー主義者が重要な役割を果たしていることは従来から広く知られていた。しかし、その思想と実践と組織の内実について詳細な検討はほとんどなされてきておらず、その結果、現代インドにおいてガンディー主義と環境運動がいかなる内的論理で結びついているのかについては十分に明らかにされてこなかった。

本論文は、北インド・ウッタラーカンド地方で活躍するガンディー主義者スンドルラル・バフグナーの思想と実践をとりあげ、彼が深く関わってきたチプコー運動およびテーリー・ダム反対運動を描写・分析することを通じて、これらの環境運動においてガンディー主義およびガンディー主義者がどのような役割を果たしているかを解明し、現代インドにおけるガンディー主義的環境運動の特徴を明らかにすることを試みたものである。申請者は、2003年2月から2007年9月までの間に延べ約13か月間の臨地調査を行っており、そこでの集中的な参与観察とインタビューで得た資料のほか、バフグナーの著作、運動で用いられたパンフレット、新聞や雑誌の報道記事、国会議事録、裁判所記録等を幅広く用いて分析を行っている。

本論文は、バフグナーの環境運動が基盤とした思想が、ガンディー主義におけるスワラージ（独立＝自己統治）およびサルヴォーダヤ（万物の向上）の理念を基本としながら、その「自己」および「万物」の範囲を人間社会だけでなく自然環

境へと広げた「昇華の哲学」にあることを示している。これによってガンディー主義的環境運動は、単にガンディー主義者が環境運動へと活動領域を拡大しただけのものでも、あるいは、断食や行脚というガンディー主義的運動の方法を適用しただけのものでもなく、独自の思想的な発展を伴っていたことが明らかになった。昇華の哲学は、人間と人間そして人間と自然のネットワークの中で、欲望の昇華を通じて自己の他者への関わり方を変え、それによって他者を変えると同時に自己も変わるという実践的なプロセスを提唱する。それによって、個々の存在の本源的な可能性を開かせ、人と自然の全てがよりよい自己実現をすることをめざすものである。

また本論文は、バフグナーはこの昇華の哲学を基盤として、地域固有の生態環境を尊重しながら、利害や立場がさまざまに異なる人々の間を媒介し、運動の中核を担うキーパーソンとしての役割を果たしえたと指摘する。たとえばチブコー運動においてバフグナーは、当初の目的であった地元の森林産業振興に代えて、森林保護を優先する環境運動のフレームを形成した。これによってチブコー運動は、地元外の人々を含みこんだより大きな運動として展開することができたのであった。ただしこれは、森林産業振興をめざしていた住民の反発を招くこととなったことも指摘されている。これをうけてバフグナーは更なる自己昇華のために、オールタナティブの森林利用の道を模索するようになった。

さらに本論文が、これまで十分な研究のなかったテリー・ダム反対運動の詳細な過程について描写したことも学術的に大きな貢献であったと認められる。これによって、当運動においてバフグナーを中心として形成されたガンディー主義者のネットワークや、祈りや歌唱を含む日々の活動の様子が初めて明らかになった。またヒマラヤ地域の行脚を通じた、参加者および地元住民たちとの対話と交流の実態についての描写も貴重である。さらにバフグナーの断食過程の詳細も記しており、そこには、自己を浄化し昇華するという思想があったと同時に、トップレベルの政治家との直接交渉を実現させ、民衆の運動への動員を促進し、報道による運動の知名度を上げるという具体的な政治的効果があったことも指摘されている。

バフグナーは、地元根差した運動を展開する一方で、多元的な主体の声を尊重し、運動をより広い運動ネットワークや普遍的な価値へと結びつけることによって、その全国的なアピール力を確保したのであった。現代インドの環境運動は、ローカルで固有な問題に普遍的なフレームを与え、より広いネットワークへとつなげていく戦略が顕著であるが、その結節点には、バフグナーのようなキーパーソンとしてのガンディー主義者の存在があることを、本論文は説得的に示している。

以上のように本論文は、スンダルラール・バフグナーと彼の主導した諸運動を事例として、現代インドにおけるガンディー主義的環境運動の特徴を解明し、それが昇華の思想と実践を基盤として、キーパーソンを結節点とした多元的主体のネットワーク型連携のうえに成立したものであったことを明らかにした優れた学術成果であり、南アジア研究ならびに社会運動研究に寄与するところが多い。よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。